

## 「みんなに届く」大学教育の探究 一青年の発達保障の観点から

西垣 順子 (JUNKO NISHIGAKI)

(大阪市立大学 大学教育研究センター)

NISHIGAKI@RDHE.OSAKA-CU.AC.JP

### 18~22歳頃の発達的特徴(認知発達)

1. (より深く多様な)価値を知りゆく抽象的総合的思考力(抽出)が本格化
  - 知識習得的学びから知識構築型学び(研究的学び)へ
  - 自分自身の学習・世界観を本格的に相対化

➢ 変換...具体的論理的思考力(10歳前後~17歳頃)

➢ 創出...新しい価値を生み出す(20歳代後半~)
2. 「創出」へと向かい始める
 

EX. 「耐える強さを変える力に」(関西学生アルバイトユニオン)

何を変えるのか?

...(自分の待遇だけではなく)社会を変える

「可逆操作の高次化における階層一段階理論」より

### 発達保障とは？

- すべての人は発達する権利をもつ。それを実現していこう(妨げるものを克服しよう)
- 「発達」を正しく知る
  - 「外部に設定された価値に自らを売り渡すことではない」「どこへ向かって伸びていくかは、真理真実に向かって自由である」(田中昌人, 2005)
  - 生涯のすべての時期に生じる多様な変化であり、「多面的・総合的な変化」(高橋恵子, 2012)
- 発達について、個人・集団・社会の系を統合的に考える
  - びわこ学園の経験(職員の発達と子どもの発達を対立させてはならない)
  - 発達を支える取組みが反対物に転化してしまわないように

### 18~22歳頃の発達的特徴(人格発達)

1. 認知発達に支えられ、認知発達を支える新たな「人格の発達の基礎」の充実・発展
2. 第2の自己客観視が、抵抗と深く捉えようとする試みを経て充実・発展し、創出的自己へと向かう時期
  - 第1の自己客観視...生活世界の中での自己客観視
  - 第2の自己客観視...社会・歴史の中での自己客観視

➢ 絹と恵子の例(丸岡秀子『ひとすじの道』)

  - ◆ 2人の自己客観視の水準の違い...理不尽に気づくことなく過労死した絹と「かたづく」に反発し自立をめざす恵子
  - ◆ 違いが生まれる背景
 

...教育の水準、異なる境遇の人と親しく接した幼少時代

「可逆操作の高次化における階層一段階理論」より

## 発達の間層間移行と「交流」

- 発達の間層間の非可逆的な移行を実現するもの  
＝交流(交通)と新しい交流(交通)の手段の獲得
- 思春期:対等・同質の他者および、非対等・異質の他者との交流
- 青年期～:「対等・異質の他者との交流」も含めた「異文化」「異性」など「異質」との交流が本格化

☆「恋愛」は、「異なる性を生きる者同士の交流」の普遍の中の特殊である

## 成人形成期(EMERGENT ADULTHOOD) 概念の登場(2000年頃～,J.ARNETT)

1. ほぼ18歳～25歳(～30歳のことも)(ARNETT, 2014)
2. 当事者の声をもとに提案された概念(ARNETT, 2014)
  - ADOLESCENTでもADULTでもない
  - 「成人ADULT」の基準は心理的なもの(離家、就労、結婚といった外形的なものではない)
3. 5つの特徴と4つの背景(ARNETT, 2014)
  - アイデンティティ探究、不安定さ、自分中心、境界にいる感覚、楽天的・楽観的
  - 産業技術革命、性的関係のあり方の大転換、女性運動、若者運動
4. 発達段階かどうかについては異論もある
  - ⇔ 認知発達研究から見ると発達段階である(発達が求めて実現しつつある発達段階)

## 大学教育、特に人文学教育の役割(専門教育として・教養教育として)

- 意味を考え直す、学ぶ×交流する
  - 第2の自己客観視の深まり
  - 学ぶこと、働くことについて
  - 家族であること(家族関係の更新)、愛することについて
  - 社会に参加すること(次世代を育てること、社会を創ること)について
- # ジェンダー教育の「(小中)高大接続カリキュラム」はありうるか!? または、大学が提供する多様な学問にジェンダー視点を組み込むことは可能か?

## 成人形成期の「ダークサイド」と女性

1. (客観的には)成人期に向けて円滑に移行していけないリスクは小さくない(失業、貧困、ひきこもり、依存症等々)
2. 成人形成期と「成人としての権利」
  - 選挙権は18歳になったが、被選挙権は?
  - 当事者になれる権利があるのは「抽出」への移行に重要である。他方で何らかの支援も必要と思われる
3. ジェンダーバイアスの存在
  - 抑圧的・暴力的な関係性の中で動けない(+孤立)危険(小杉他, 2015)
  - 経済的基盤を失う危険、健康を損なう危険
  - ✓ 乾グループの縦断研究に登場する女性たち...家族を支える、恋人からのDV、経済的不安定、不健康・病弱

**青年期女性の困難の見えづらさ・理解されなさ、  
実態解明の必要性**

1. 「女性活躍」の影で、男女の経済格差は拡大
  - ・「非正規シングル女子」の問題...35歳まで放置？
  - ・「結婚すればよい」のウソ...男性の低所得化と「嫁入り経費」
2. 「親が作った家族」がのしかかる(...実態が見えない)
  - ・「家事やケアで学校・大学に行けない」(小杉他、2015)
  - ・苦しい条件下で妊娠・出産することも
  - ・同様の状況にある男子の状況はより見えない
3. 大学・短大生の実態調査も必要  
(杉田(2015)は高卒女性の調査:「学校から仕事への移行」という概念そのものが成立しない)  
 E.G., 学習支援、経済支援、生活支援がどの程度・どのようなものが  
 必要なのか？
4. 当事者として「声を上げる」可能性・支援可能性は！？

**実態調査に加えて...**

**大学教育を「みんな」に届ける目的  
＝子どもを育てる力のある社会を創出する**

- ・「自由を要求する個人」と「適応を要請する社会」の相互作用 ←このサイクルをまわす！
    - 職業選択の自由 + 産業革命・産業構造の変化
    - 女性の社会参加要求 + 少子高齢化・労働力不足
    - 「青年期・成人形成期を過ごすことの要求」
- + ???  
これをあぶりだす↑

**実態調査に加えて...**

**大学教育を「みんな」に届ける目的  
＝子どもを育てる力のある社会を創出する**

- ・「自由を要求する個人」と「適応を要請する社会」の相互作用
    - 職業選択の自由 + 産業革命・産業構造の変化
    - 女性の社会参加要求 + 少子高齢化・労働力不足
    - 「青年期・成人形成期を過ごすことの要求」
- + ???

**文献リスト**

- ARNETT, J 2014 "EMERGING ADULTHOOD: THE WINDING ROAD FROM THE LATE TEENS THROUGH THE TWENTIES", OUP US
- 乾彰夫(編) 2013 『高卒5年 どう生き、これからどう生きるのか:若者たちが今く大人になる>とは』 大月書店
- 小杉礼子・宮本みち子(編著) 2015 『下層化する女性たち:労働と家庭からの排除と貧困』 勁草書房
- 杉田真衣 2015 『高卒女性の12年:不安定な労働、ゆるやかなつながり』 大月書店
- 西垣順子 2015 「1960-70年代の発達保障運動と療育実践の記録映画を使った発達教育の可能性と今後の研究課題」『人間発達研究所紀要』第28号 PP.18-30
- 西垣順子 2014A 「『可逆操作の高次化における階層—段階理論』に基づく大学生の発達」『人間発達研究所紀要』第27号 PP.15-29
- 西垣順子 2014B 「教養教育の到達目標に関する検討—『可逆操作の高次化における階層—段階理論』による青年期の発達保障の観点から—」『現代社会と大学評価』第9-10合併号 PP.143-161
- 西垣順子 2016 「青年期教育としての大学教育を拓くための研究課題—発達心理学の観点からノンエリート青年の発達保障と大学教育を考える—」大学評価学会(川口・西垣)編 『シリーズ「大学評価を考える」第7巻 大学評価と「青年の発達保障」』(PP.9-28)晃洋書房
- 西垣順子 2016 「あとがき」 同上
- 西垣順子 2016 「発達を識ってゆくことの意味と意義」中村隆一・渡部昭男(編著)『人間発達研究の創出と展開—田中昌人・田中杉恵の仕事を通して歴史をつなぐ』(PP.146-157)群青社

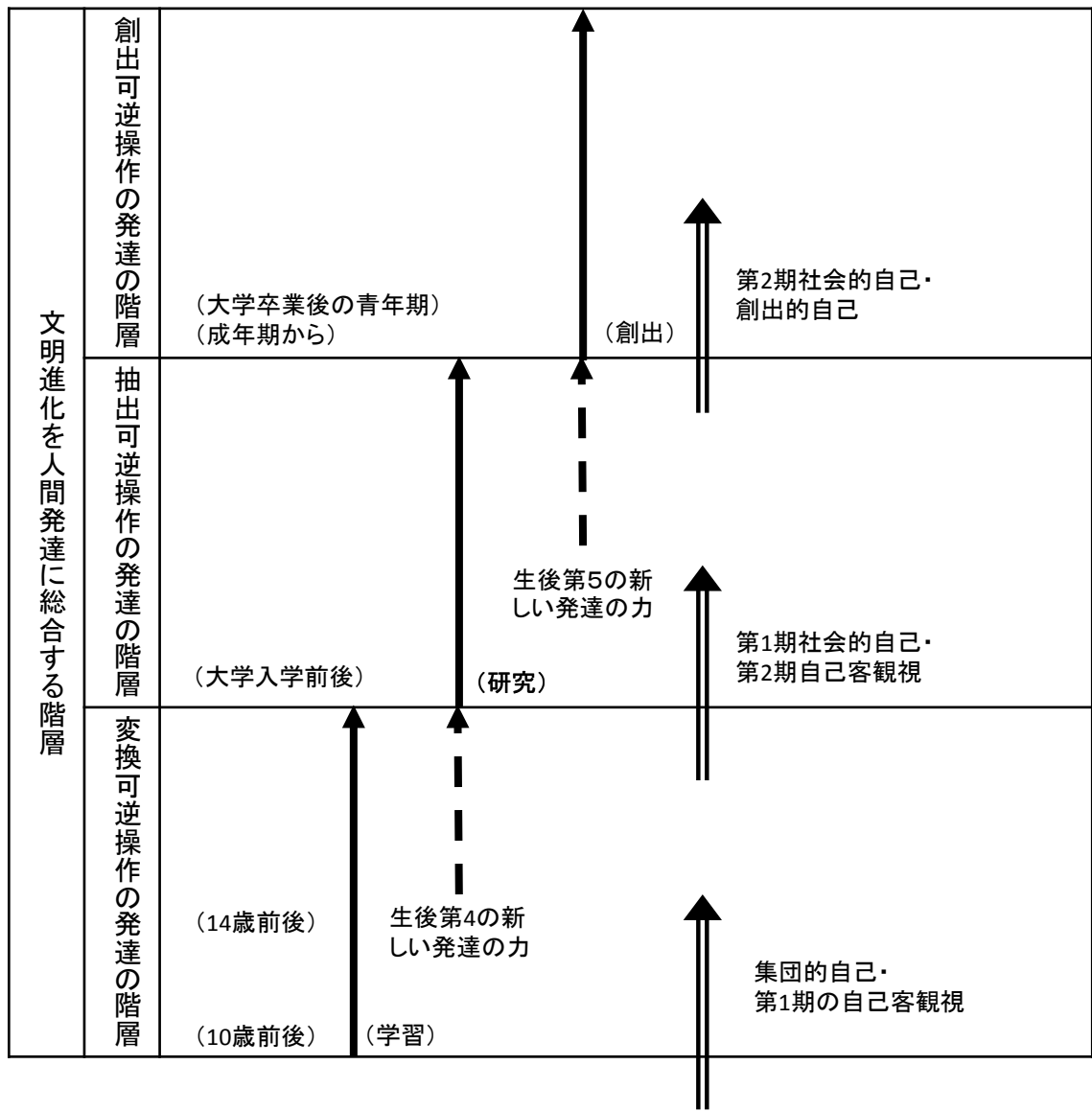


図1. 10-20歳代の発達における可逆操作(実践矢印)と新しい発達力(点線矢印)と人格の発達の基礎(二重線矢印)

注1：10-20歳代は通常の場合で変換、抽出、創出の階層に相当し（左から2列目）（各階層における段階間移行は省略）、これらの3階層は階層-段階理論で3つめの大階層に含まれる（最左列）（第1大階層は「生命進化を人間発達の総合する階層」で胎児期に相当し、第2の大階層は「人間進化を人間発達に総合する階層」で生後10歳くらいまでに相当する）。

注2：それぞれの可逆操作の特徴を端的に現す単語として「学習」「研究」「創出」を図中に示した。

注3：それぞれの階層の半ば（第2段階の終わり、第3段階の開始）に新しい発達力が誕生し、それ以前の古い力と協同して階層間の移行が成し遂げられる。「新しい力」は次の階層における発達を主導していく（図中央列）。これらと相互に作用しあいながら併行して、人格の発達の基礎が生成、拡大、充実、発展していく（図右列）。

注4：生後第4の新しい発達力とは、「連帯した価値を深く識っていく力（田中，2005a）」や「連帯・協力し、教えることによってより深く学び、創造的な経験を基に価値を作り出す力（田中，2002a）」と呼ばれる。生後第5の新しい発達力は命名がされていない。